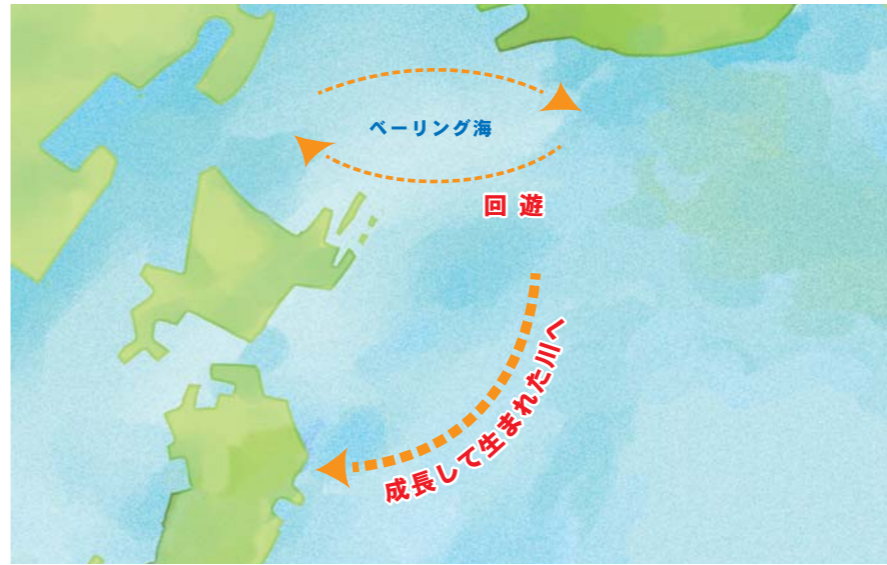


川で生まれ、海で育つサケを 人の助けで増やす

川で生まれ、海へ下り、ベーリング海まで行って成長するサケ。市内では例年500万尾の稚魚が放流されています。次の世代のサケたちは元気に旅立ち、大きくなって再び生まれた川に帰ってきます。



市内で行われてきたサケのふ化・放流

日本の川で生まれたサケは北太平洋を北上。3〜4年後、成長して産卵のため日本に向けて移動します。生まれた川まで帰ってきたサケは人工のふ化に使う大切な親サケ。知事の許可を得た採捕者が捕獲します。

県内には19カ所にふ化場があり、市内では1977（昭和52）年に「北上川漁業協同組合大嶺さけふ化場」を建設。より安定してサケ資源を活用するための増殖事業が本格的に始まりました。大嶺さけふ化場からは、今日までたくさんの稚魚が海へと旅立っています。人工のふ化・放流に要する費用は、捕獲しても若すぎたり傷ついたりして親サケに適さないサケや採卵後のサケを市場に卸すほか、国や県、海の漁業者からの支援により事業が継続されています。

海で生き残れるよう丈夫な稚魚を育てます

県内では16の河川から合計6千万尾のサケを放流しています。採卵から放流までに要する日数は約120日。この間、卵や稚魚の管理にとても気を使います。採卵・受精後はごみなどを洗い流し、死んで白く濁っている卵を取り除きます。この作業はとても重要で、死んだ卵からはカビが発生してほかの卵やふ化した稚魚に悪影響が出ることがあります。そのため、専用の機械や人の目で検査をし、薬剤で殺菌します。ふ化層にはきれいな水を循環させ、ふ化した稚魚に刺激を与えないよう大切に飼育しています。

北上川漁業協同組合 業務課長 高橋 寿幸さん(40)



幼魚を放流するまで



捕獲されたサケはトラックでふ化場へ運ばれます。まだ成熟していないサケは、ふ化場で卵を産めるようになるまで飼育されます。



親サケから、ふ化させるための卵を取り出し受精させます。卵は柔らかくて潰れやすく、素早く作業する必要があります。そのため一番大変な作業です。



ふ化した稚魚は水槽や専用の池で飼育。食べ残しの餌やふんを毎日掃除し、稚魚同士がぶつかり傷付かないよう十分な水量で育てます。



水温が高くなる2〜4月が放流時期。体長5センチ、体重1グラムまで成長した稚魚を川へ放流します。地域の子どもの放流体験も行います。

子どもたちに自然のサイクルを伝えたい

Interview



北上川漁業協同組合 採捕者 大野 正好さん(69)

私は祖父がサケを捕まえるのを見て育ち、父の後を継ぐように採捕者になりました。サケの採捕は自然が相手。見込んだ成果がなかなか出ない事もあります。市内の捕獲場所は海に近過ぎず、また、離れ過ぎず適度に成熟したサケを捕獲することができます。市内では一番条件の良い場所に立地しています。しかし、近年は不漁が続いており、今年はサケの遡上の時期が遅くなるなど十分な親サケの確保ができるか心配です。

川で生まれ、海で育つサケ。その多くは成長して生まれた川へ帰ることなく捕えられ、私たちの食卓に上ります。県内では、サケが生まれた川まで帰ってくる回帰率は4%程度。川に上ったサケも捕えられたり自然に産卵したりした後、冬を越さずに命を閉じます。こうしたサケの命は、

あるときは新しいサケの子どもとして、またあるときは私たちの体となって生きています。

組合では、市や地区のコミュニティなどと協力して、親サケの腹から卵を取り出す採卵体験や育った稚魚の放流体験を行っています。子どもたちは、授業でサケのふ化・放流について学び、実際に放流を体験することで、サケを通して自分たちも川や海とつながっていることを感じます。放流体験では子どもたちに「川は生き物」と教えています。きれいな水にサケを放流すれば、成長して帰ってきますが、汚れた川には上って来ません。体験学習を通して伝えたいのは、身近な北上川にある命のサイクル。河川を大切にする気持ちが養われ、未来の登米市の自然が守られることを願っています。

自然の恵みを人の手で 守り次世代へつなぐ

サケは生まれた川に戻り、川底に産卵し次の世代に命のバトンをつないでいきます。今まで続いてきた自然のサイクル。人の都合で捕獲し過ぎると、命をつないできたバランスが崩れ自然の力だけでは数を保つていくことができなくなります。

市内でも続けられている人の手でサケを増やす取り組み。親サケから卵を採り、受精させ、たくさんの手間をかけて卵を管理。ふ化した稚魚は大切に育てられ、たくましく海へと下っていきます。

組合では、サケを通して命のサイクルを伝えることにも力を入れています。豊里小・中学校では毎年5年生がサケの放流を体験。授業や放流を通して命の尊さ、自然を守ることの意味を学んでいます。

「市内でサケの放流をしていることを知ってほしい」と話す組合の人たち。市内にサケを捕獲する場所があり、何のために捕っているのかを伝えていきます。長い時間をかけて育まれてきた自然の恵みを次の世代につないでいく。一人でも多くの人にその意義を伝える取り組みは続きます。